

# 「胎生」という問題

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの一『大無量寿経』を読む」の第131回から133回が、親鸞仏教センターに於て、対面講義、及びオンライン配信のハイブリット形式で行われ、当センター所長・本多弘之が問題提起をし、質疑応答がなされた。ここでは、その第133回から一部を紹介する。

(親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一)

『真宗聖典』（東本願寺出版、以下『聖典』）の81頁に、「かの国の人民、胎生の者あり。汝また見るや、いなや」とあります。「かの国」、阿弥陀の浄土、その中に「胎生の者」がいると。直前には、弥勒段と呼ばれるところを結んで、阿難を呼び出して語り掛けるときに、宗教体験の光の世界というものをまず語っています。その世界にこちらから見えるものをいちいち確認した上で、その世界の中に救われたが如くにしてある存在のもっている問題が教えられる。すべてが平等で、すべてが光の世界の如くに見える中に胎生の者がいるということを指摘するわけです。「その胎生の者の処するところの宮殿、あるいは百由旬、あるいは五百由旬なり」（『聖典』81頁）。この箇所からしばらく、親鸞聖人は『教行信証』化身土の巻に引文されております。化身土の在り方として胎生ということが押さえられる。「おのおのその中にしてもろもろの快樂を受くること、忉利天上のごとし」（同上）。その胎生の者がある場所は、百由旬や五百由旬、そういう比較的大きな世界なのですけれども、その中である意味で喜びの中に浸り込んでいるような在り方です。

次に、「もし衆生ありて、疑惑の心をもつてもろもろの功德を修して、かの国に生ぜん」と願ぜん」（同上）。「疑惑の心」、如来の願力を本当に信ずるといよりも、それをどこかで疑惑している。そ

れは、「仏智・不思議智・不可称智・大乘広智・無等無倫最上勝智を了らずして、この諸智において疑惑して信ぜず。しかるに猶し罪福を信じ善本を修習してその国に生ぜん」と願ぜん」（同上）。罪を恐れる心、あるいは幸福を求める心を、「罪福」を信じるのだと言われる。この世での善悪に関わる心で、善本を修習して、そして阿弥陀の国に生まれようと願ずる。「このもろもろの衆生、かの宮殿に生まれて寿五百歳、常に仏を見たてまつらず。経法を聞かず。菩薩・声聞・聖衆を見ず。このゆえにかの国土においてこれを胎生と謂う」（同上）。本願成就の仏土の中に、光の世界ばかりがあるが如くに見えるけれど、その中に胎生という在り方があって、親鸞聖人はそれを方便化身土だと。浄土と言うけれど、浄土に真実報土と方便化身土という名前の違う浄土がある。本当に真実の報土に生まれることができるということは、仏力に対する、仏智に対する信心というものが衆生に与えられてこそである。衆生において本願力を信ずるといふことがあって、真実の報土が信心に報いる世界として与えられる。けれども、どこかにちょっとでも疑問、疑惑が残っている場合には胎生なのだよと。それは仏を本当に見ることにはならない。こういう厳しい指摘が出されてくるわけです。

その本質は、やはり本願力に対する疑いがある、自分に対する、自力に対する執着が抜けない。そういう自分が残っている限り、我々は凡夫ですから、凡夫として自分が残るのですが、凡夫である限りにおいて、真実に本願力に依ることが、つまり信の一念に立つということができない。何かどこかで本願を利用して自分が助かるのだと思っている場合の助かり方というものが、方便化身土として教えられてくる。こういうことだと思います。